

二種の『小学通常物問答』(明治一〇年)について  
— 付 語彙集 —

The analysis of vocabulary of TSUJIBUTU-MONDOU(1877)  
Appendix a words list of it

大橋 敦夫  
OHASHI Atsuo

要旨

キーワード：日本語語彙・明治期語彙・『小学通常物問答』

明治一〇(一八七七)年に刊行された二種類の『小学通常物問答』を軸にして、語彙の比較考察を行なった。類書を加え、一種二本(計四本)の語彙分析の結果、それぞれの特徴は次の通りであることが明らかとなった。すなわち、『小学通常物問答』(和田幾太郎・生駒東太)は、語のフリガナに特徴があり、類書の『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻藤三郎)は、開化語を積極的に紹介している。また、『小学通常物問答』(小林

義則)と『小学通常物問答』(安倍為任)は、スタイルが似ているが、問答数は、安倍の方が多く、語のフリガナ例は、小林の方が豊富である。

一 はじめに

判型・内容が異なるにも関わらず、同名『小学通常物問答』(明治一〇(一八七七)年)の架蔵本が二種ある。両書の比較を出発点に、収録語彙の分析を行ない、同時期の資料内における性格付けを試みる。

国立国会図書館デジタルコレクションのサイトで、「通常物問答」をキーワードにして検索すると、次の九点が掲出される(二〇二〇・八・一八

現在。

- ① 『下等七級問答集成』川尻藤三郎編(奎星堂 一八七七年)
- ② 『小学通常物問答』小林義則編(学経堂 一八七六年)
- ③ 『小学通常物問答』和田幾太郎・生駒東太編(近江佐平 一八七七年)
- ④ 『小学通常物問答図解』志水鳩峯著(渡辺重助 一八八〇年)
- ⑤ 『新撰小学通常物問答、第一編』石橋俊良篇(正文堂 一八八〇年)
- ⑥ 『通常物問答』能島武夫著(宝雲堂 一八七七年)
- ⑦ 『通常物問答』四科詳説、卷之上』宮島純熙著(村上勘兵衛等 一八七六年)
- ⑧ 『通常物問答図解』志水鳩峯著(正文堂 一八七五年)
- ⑨ 『通常物問答必携』下等小学第七級課』北原地球治著(温故堂 一八七八年)

これらの資料の殆どは、書名や巻頭の緒言(此書ハ小学七級生通常物問答ノ為メニ輯スルナリ)③などから、当時の小学七級(現在の小学校一年生の後半)を対象としたものであることが明らかである。

しかしながら、その内容・構成はバラエティに富んでおり、収録語彙も多岐の分野にわたり、その一致率は高くない(後述)。それぞれに個性があり、丹念に読みほぐしていく必要がある。

具体的には、次のような特徴があり、分析すべき課題を要している。

① 『下等七級問答集成』中の『通常物問答』は、七〇語を収録。判型と書式が③と類似している。③の収録語も、七二語であり、比較考察に適し

た存在である(↓本稿後半で実践する)。

②と同名で、判型・形式の違う架蔵本があり、異同を明らかにする必要がある(↓本稿後半で実践する)。

④は、⑧の後刷りとみられる内容だが、題名以外に異動があるか検討すべきである。

⑤は、二二一の問い(前半)と、その答え(後半)を収録する。多数の問答の中で展開されるキーワードが、他の資料の中ほどの程度、顔を出しているのか、興味あるところである。

⑥は、旧稿(注①)で扱っているが、上篇で、問答のあらましについて述べ、下篇で具体的な問答を展開している。本によつては、中見出しの題名に「二名教師補」のサブタイトルを付すものがあり、教師用のハンドブックの色彩を感じさせる。

⑦は、三巻構成で、飲食科(卷之上)、器財科(卷之中)、衣服科・家名科(卷之下)に分けて、語彙を掲出する。

⑨は、類書中、最も個性的な書式・構成を持つものである。全編、表形式で語彙を掲げ、解説を施している。

以上のような資料の特徴をふまえ、本稿では、次の二点を考察の課題とし、分析を進めることとする。

I 『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻 一八七七)と

『小学通常物問答』(和田・生駒 一八七七)の語彙の比較

II 『小学通常物問答』(小林 一八七六)と

『小学通常物問答』(安倍 一八七七)の語彙の比較

二 『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻 一八七七)と

『小学通常物問答』(和田・生駒 一八七七)の語彙の比較

まず、両書の書式(架蔵本は書誌も含む)を簡潔に紹介する。

◆①『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻 一八七七)

尺(モノサシ) 器財(ギザイ)ノ類(ルイ)ニシテ竹等(タケナト)ニテ造(ツク)リ物形(モツケイ)ノ長短(チヤウタシ)ヲ度(ハカ)ル具(グ)ナリ

◆③『小学通常物問答』(和田・生駒 一八七七)

印象(イン) △何ニテ造リタルモノナリヤ

○金銀銅水晶獸角象牙木石等ニテ作ルナリ

各語に図を掲げる点は共通だが、文章の展開が異なり、それぞれ、解説を付す(①)、あるいは問答を展開する(③)、と個性を主張している。

横長の体裁であることも共通であり、項目語の収録語数もほぼ同数である(①七〇語・③七二語)。

ちなみに、③の架蔵本の書誌は、次のとおりである。

和装 四つ目綴じ 淡緑色表紙 一二・〇×一七・九cm

序二丁・緒言二丁・本文八丁(八丁ウは、書籍広告)

編集人：和田幾太郎・生駒東太(堺縣平民・和泉国堺)

出版人：近江佐平(堺書肆)

明治一〇年一月出版

二一 共通の語彙

では、両書の語彙(項目語)を比較してみよう(本稿末の語彙集参照)。

まず、両書に共通の語は、次の二〇語で、約三割が一致している。

イン(印・印章) カマ(鎌) カミソリ(剃刀)  
クシ(櫛) サジ(匙) シヤウジ(障子)  
スキ(鋤) タタミ(畳) ノコギリ(鋸・鋸子)

ハハキ(箒) ハシ(箸) ハシゴ(梯)

ハナイケ(花斗・花瓶) フクサ(服紗・袱)

ベンタウ(行厨) マス(升・斗量) ムシロ(席・筵)

モノサシ(尺・度) ヤタテ(墨斗・矢立)

リウトスキ(龍吐水) ↑二例ある場合は、(①・③)の順。

日常生活で常用する道具類が多い。漢字表記は、現代と共通の例が多いが、この時期、あるいは各資料特有のもの(花斗・行厨・斗量・墨斗など、後述)も含んでいる。

二二 注目すべき語彙

次に、解説・問答の対象とする項目語に加え、解説文・問答文の中に現れる語彙・表記について、注目すべき事例を以下に掲げる。

(1) 江戸期の名残を感じさせる語彙(項目語)

①『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻 一八七七)

スズリ(硯) ススリハコ(硯箱) スミ(墨) ニクルマ(荷車)

車 ヤタテ(墨斗) リウトスキ(龍吐水)

③『小学通常物問答』(和田・生駒 一八七七)

ケサン(書鎮) ショウロクワン(蒸露罐) ツケギ(發燭) ヤ

タテ(矢立) リウトスキ(龍吐水)

(2) 明治の文明開化を感じさせる語彙(項目語)

①『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻 一八七七)

コウモリカサ(蝙蝠傘) ジョウキセン(蒸気船) セキバン(石盤) セキヒツ(石筆) ハシヤ(馬車) パン(麵包) ビン

(硝子瓶) ランプ (硝子燈)

③ 『小学通常物問答』(和田・生駒 一八七七)

適例なし

江戸期の名残を感じさせる語彙は、①・③とともに、少数(六語・五語)だが、明治の文明開化を感じさせる語彙は、③はほとんどないのに対し、①は八語ある。①は、新時代の息吹を積極的に取り込んだ語彙集と言える。

(3) 現代語では常用しない漢語の表記

〈項目語・解説文・問答文〉

① 『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻 一八七七)

〈項目語〉

涼爐(コンロ) 挿盆(スリバチ) 鉤瓶(ツルベ) 花斗(ハナイク) 硝子瓶(ビン) 行厨(ミンタウ) 水滴(ミヅイレ) 席(ムシロ) 墨斗(ヤタテ) 硝子燈(ランプ)

〈解説文〉

席(シキモノ) 席物(シキモノ)

③ 『小学通常物問答』(和田・生駒 一八七七)

〈項目語〉

紡車(イトグルマ) 招牌(カンバン) 注碗(シヤウゴ) 發燭(ツケギ) 千里鏡(トラメガネ) 書函(フバコ) 行厨(ミンタウ) 書櫃(ホンバコ) 斗量(マス) 顕微鏡(ムシメガネ) 錯子(ヤスリ)

〈問答文〉

磁器(セトモノ)

(4) 語の読み(フリガナ)に見える特徴(解説文・問答文)

A. 類義の音読語の読み

① 『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻 一八七七)

物品(シナモノ) ↑ブツピンの読みも添えられている。

③ 『小学通常物問答』(和田・生駒 一八七七)

器械(カウグ) 花革(キンカラカハ) 火災(クワジ) 木匠(タイ) 器械(ダウグ)

B. 類義の訓読語の読み

① 『下等七級問答集成・通常物問答』(川尻 一八七七)

適例なし

④

③ 『小学通常物問答』(和田・生駒 一八七七)

銅鉄(アカガネ) 商人(アキンド) 数個(イクツ) 毛髮(カミ) 青銅(カラガネ) 確嘴(キネ) 衣類(キモノ) 衣裳(キモノ) 帛尺(クジラザシ) 製タル(コシラヘ) 書(シルシ) 財宝(タカラ) 尋常(ツネ) 書状(テガミ) 門扉(トビラ) 往復(トリヤリ) 泥土(ドロ) 花卉(ハナ) 長方形(ホソナガ) 都合(ホド) 本体(ホネ) 店前(ミセサキ) 本体(モト) 諸物(モノ) 布機(モメンバタ)

三 『小学通常物問答』(小林 一八七六)と

『小学通常物問答』(安倍 一八七七)の語彙の比較

まず、両書の書式を確認する。

◆② 『小学通常物問答』(小林 一八七六)

今上皇帝ノ御名（オシナ）ヲ問○對（コタヘ）テ曰睦仁（ムツヒト）〔1・オ〕

問テ曰西京ハ如何ン○答テ曰畿内山城國ニアリ〔3・ウ〕

◆『小学通常物問答』（安倍 一八七七）

問今上皇帝ノ御名ハ○答睦仁〔1・オ〕

問三府ハ何處ヲ云フヤ○答東京府京都府大阪府ナリ〔5・ウ〕

問藩トハ何レヲ云フヤ○答琉球藩ナリ〔6・オ〕

安倍は架蔵本につき、書誌を掲げる。

和装 四つ目綴じ 淡黄土色表紙 二一・九×一四・六cm

本文一九丁のみ

宇田川照賢校正・安倍為任編輯 共和力舎蔵版

出版人・品川金十郎（千葉）・品川澄羅（東京）・同支店（千葉・三

川屋源七（東京）

明治一〇年六月出版

問の後に答えを掲げるという形式は、共通ながら、②小林は、問いかけの方法が、前掲のごとくニパターンある。一方、安倍は、ワンパターンで単調である。

質問の内容は、次のごとくで、テーマは共通するものが多い。

◆②『小学通常物問答』（小林 一八七六）

皇室・元号・天皇祭・天長節・皇城・三府・京・省院・学区・国内移動・日数・月・尺・量・距離・里程・貨幣・衣類・親族・学校・紙・動物・植物・鉱物

◆『小学通常物問答』（安倍 一八七七）

皇室・等級・元号・天皇祭・天長節・皇居・三府・五畿七道・学区・国内移動・日数・月・尺・量・距離・面積・衣服・貨幣・紙・交通・絵図・禽獸・保身・親族関係・江戸期の貨幣・小学校

などである。しかし、問の数は、一六六（②小林）VS二〇三（阿倍）で、

安倍の方が四〇問ほど多い。②小林は、最後に質問の例題（該校ニテ問答ノ概略）を九項目掲げている。

○該縣令。参事及ヒ區戸長副。學區取締の姓名

○縣廳ノ設立アル地名及ヒ里程方位

○國郡村町称号

など、計九項目（フリガナ省略）。

三一 時代相を表す語彙

◆②『小学通常物問答』（小林 一八七六）

東京府↑三府の内の一つ。

◆『小学通常物問答』（安倍 一八七七）

堺縣↑三五縣の内の一つ。

琉球藩↑この当時、唯一の藩であった。

マンテル・ツボン↑和装の語彙と並んでおり、和洋混在の相を

表している。

三二 注目すべき語彙とその表記

問答に現れる注目すべき語彙・表記を掲げる。

(1) 現代語とは異なる漢字表記

◆②『小学通常物問答』（小林 一八七六）

管督(クワントク) 轡道(テツ) 量(マス)

◆『小学通常物問答』(安倍 一八七七)

適例なし

(2) 類義の字音語で読ませている

(重箱読み・湯桶読みを含む)

◆②『小学通常物問答』(小林 一八七六)

必用(イリヨウ) 税(ウンシヤウ) 租税(ウンジヨウ) 文  
 事(ガクモン) 産業(カゲウ) 典(ギシキ) 儀(ギシキ)  
 精力(キリヨク) 清潔(キレイ) 新鮮(キレイ) 資財(キ  
 ンギン) 大気(クウキ) 氣候(シコウ) 職業(シゴト) 己  
 (ジブン) 壯健(ジヤウブン) 親戚(シンルイ) 親族(シンル  
 イ) 親者(シンルイ) 世上(セケン) 永終(ソク) 定格  
 (ネダン) 位置(バシヨ) 方位(ホウカク) 滋養(ヤウジ  
 ヤウ) 有司(ヤクニン) 思慮(レウケン)  
 ◆『小学通常物問答』(安倍 一八七七)  
 適例なし

(3) 類義の訓読語で読ませている

◆②『小学通常物問答』(小林 一八七六)

的(アイテ) 幾種(イクイロ) 海上(ウミ) 販売(ウリサ  
 バキ) 輸出品(ウレシナ) 崩御(オカクレ) 強奪(オシト  
 リ) 平穩(オタヤカ) 尊称(オナ) 諸(オホクノ) 游泳  
 (オヨギ) 雙語(カタコト) 鉦山(カナヤマ) 最(ゴクノ)  
 消化(コナレクワ) 昆虫(コムシ) 混堂(コヤ) 方(シカ

タ) 類(シナ) 通算(シユンアガリ) 汁氣(シル) 鹹

味(シヨカラク) 柔順(スナホ) 教育(ソダテゴト) 諳誦

(ソラヨミ) 對(ソロヒ) 依頼(タノミ) 卵生(タマゴ)

勉強(ツトムル) 俸祿(テアテ) 過圧(トドメ) 姓名(ナ

マヘ) 爪十虫蟲(ハヒムシ) 陰處(ヒカゲ) 日程(ヒカズ)

人員(ヒトカズ) 一介(ヒトツ) 勞(ホネオリ) 功勞(ホ

ネオリ) 山陵(ミササギ) 尊靈(ミタマ) 里程(ミチノリ)

水銀(ミツカネ) 冗費(ムダツイヘ) 順呼(ヨヒジユン) 怠

惰(ヨコタリ)

◆『小学通常物問答』(安倍 一八七七)

適例なし

(4) 熟字訓のような読み仮名

◆②『小学通常物問答』(小林 一八七六)

商(アキウト) 要遊(アソビ) 玩耍(アソビ) 執交加数(ア  
 ヤトリ) 鉦物(アラカネモノ) 概略(アラマシ) 幾個(イ  
 クツ) 不正(イツワリ) 海參(イリコ) 江豚(イルカ) 英  
 國(インギリス) 動物(ウコクモノ) 背面(ウシロ) 植物  
 (ウヘモノ) 生誕(ウマレ) 勅使(オツカイ) 玩器(オモ  
 チヤ) 玄米(クロゴメ) 疵傷(ケガ) 汚穢(ケガレ) 本  
 年(コトシ) 精米(シロコメ) 工(シヨクニン) 旋回(マ  
 ワリ) 若干(ソコバク) 放鷺(タコアゲ) 裁量(タチヌヒ)  
 蚕卵紙(タネカミ) 打毬(タマツキ) 交際(ツキアヒ) 職  
 務(ツトメ) 歷年(ツムトシ) 同伴(ツレ) 執丸子(テタ  
 マトリ) 老人(トシヨリ) 老幼(トシヨリワカモノ) 称呼

(トナヘ) 称号(トナヘ) 交換(トリカヘル) 跳繩(ナハトヒ) 平常(ナミ) 通常(ナミ) 普通(ナミ) 通例(ナミ) 幣帛(ヌサ) 漆器(ヌリモノ) 談話(ハナシ) 打燕(ハネツキ) 太陽(ヒ) 曾孫(ヒコ) 農(ヒヤクシヤウ) 秋干(ブランコ) 祭典(マツリ) 前件(マヘ) 築毬(マリツキ) 主上(ミカド) 聖躬(ミカド) 豊穰(ミノリ) 基礎(モト) 陶器(ヤキモノ) 士(ヤクニン) 玄孫(ヤシヤゴ) 放學(ヤスミ) 幼年(ワカモノ) 理(ワケ) 奢侈(ヲゴリ) 教育(ヲシヘ) 成人(ヲトナ) 祭儀(ヲマツリ) 極(ヲワリ)

◆『小学通常物問答』(安倍 一八七七)

高祖父(オホヲヂイ) 本年(コトシ) 金剛石(シヤマント) 祖父母(チヂババ) 玄孫(ヒヒマゴ) 曾孫(ヒマゴ) 再従弟(マタイトコ) 伯叔父姑(ヲヂヲバ)

(5) 左訓注のような読み仮名(左側に付されるものもあり)

◆②『小学通常物問答』(小林 一八七六)

アタル(適ス) イフマデモナシ(不待論) イリヒノカタ(没方) オホクノコケライ(群臣) オヲカミ(遙拝) カクモンノミチ(学科) クサレ(腐敗) クラウ(喫シ) コヘノオハリ(音尾) ジュンニシヤウセヨ(遙誦) スベテソウイヨウ(公私普通) セイヤウノコヨミ(洋曆) タカクカハク(高燥) タスケアフ(相互扶助) チノアタタカサ(血温) デキアガリノコメ(新穀) トコロ(位置) トリイレ(収入) ネンガウノカハリ(改元) ネンガウヲコシラヒタル(建元) ノドノシタ

(喉下) ハシメノゴセンソ(始祖) ハハカタノイトコ(舅姨) ホカノクニ(海外) ホネヲリラク(勞逸) マシ(増加) マワリヲワル(旋了) ミヨノカス(世数) ヤスクマモラン(安護) ワルキニホヒ(臭気) ヲスチカラ(圧力)

◆『小学通常物問答』(安倍 一八七七)

ミカドノソボ(太皇太后) ミカドノチチ(皇考)

四 まとめ——今後の課題——

本稿では、考察・分析の対象として、資料の項目語の語彙に加え、解説文・問答文の語彙およびその表記を取り上げた。今後の課題として展開すべきテーマは、次のようなものが考えられる。

資料面では、「一 はじめに」で指摘した資料相互の比較検討を行う必要がある。具体的には、

○『通常物問答図解』志水鳩峯著(文正堂 一八七五年)と

『小学通常物問答図解』志水鳩峯著(渡辺重助 一八八〇年)

の比較。↑版の違いによる内容の違いがあるかを見る。

○『通常物問答』能島武夫著(宝靈堂 一八七七年)と『新撰小学通常物問答、第一編』石橋俊良篇(正文堂 一八八〇年)の比較↑問答のテーマにどれくらい共通性があるかを探る。

などである。

次に、実際の現場で、類書がどのように用いられていたか、探索を進めたい。この時期(明治五〜一二(一八七二〜一八七九)年)は、指定教科書期で、国語科には、七つの教科目があった。それは、綴字・単語・会話・読本・習字・文法・書牘である。授業記録等を渉猟し、類書がどのように使われていたのか、子どもたちに向けてどんな授業が展開されていたの

か、語彙の定着は、どの程度であったのか、探ってみたい。

また、関連の深い資料として、掛け図の語彙との比較も視野に入れ、初等教育段階での教育基本語彙の実態を明らかにしていきたい。

さらに、資料中に展開する表記例が現代通行の例に収束していく状況も抑えたい。それは、各語誌の考察を積み上げること繋がる。

今回、取り組んだ漢語表記とその読み例については、江戸期の漢籍の字引(注②)の系譜をひく、明治期の教科書字引の例との共通点(類義の音読語や訓読語を掲出する)を感じさせる。この点の追究も課題に加えておきたい。

## 注

- ① 大橋敦夫『通常物問答』(明治一〇年)の語彙とその性格——付語彙索引——『上田女子短期大学紀要』第四三号 二〇二〇・一
- ② 多数存在するが、たとえば『四書字引捷徑』文化一〇年(架蔵)などが挙げられる。

## 【参考文献】

『子どもたちの物語——啓蒙・教訓・お伽ばなし——』編集・執筆：関場 武・慶心義塾図書館(慶心義塾図書館 二〇〇四年一月)

## ■語彙集

### 〔凡例〕

- ・項目語を五十音順に掲げる。
- ・仮名遣いは、原文のままである。
- ・漢字の字体は、できるだけ原本の表記を尊重した。

『下等七級問答集成』川尻藤三郎編（奎星堂 一八七七年）  
「通常物問答」

硯	鋤	燭臺	蒸気船	障子	匙	鯿	涼爐	曆	独楽	碁盤	蝙蝠傘	櫛	釘貫	蚊帳	剃刀	紙	鎌	笠	轆	掛物	碓	印
スズリ	スキ	シヨクダイ	ジヨウキセン	シヤウジ	サジ	ササラ	コンロ	コヨミ	コマ	ゴバン	コウモリカサ	クシ	クギヌキ	カヤ	カミノリ	カミ	カマ	カサ	カゴ	カケモノ	ウス	イン

麴包	箒	打燕	花斗	旗	馬車	梯	箸	鋸	荷車	提灯	鉤瓶	机	衝立	地図	炬袋	暈	太鼓	算盤	石筆	石盤	石炭	播盆	墨	硯箱
パン	ハハキ	ハネ	ハナイケ	ハタ	ハシヤ	ハシゴ	ハシ	ノコギリ	ニクルマ	テウテン	ツルベ	ツクエ	ツイタテ	チツ	タバコイレ	タタミ	タイコ	ソロバン	セキヒツ	セキパン	セキタン	スリバチ	スミ	ススリハコ

扇	龍吐水	硝子燈	蝋燭	墨斗	尺	毛氈	眼鏡	席	簀	水滴	升	盆	帽	行厨	船	筆筒	筆	服紗	硝子瓶	屏風	柀
ヲフギ	リウトスキ	ランプ	ラウソク	ヤタテ	モノサシ	モウセン	メガネ	ムシロ	ミノ	ミツイレ	マス	ボン	ボウ	ベントウ	フネ	フデツツ	フデ	フクサ	ビン	ヒヨウブ	ヒヨウシキ

三弦	匙	劔	書鎖	土蔵	櫛	釘	錐	招牌	匏	箸	碓	鳴居	剃刀	鎌	壁	鐵槌	合羽	重箱	鑰	巨銃	印章	紡車
サミセン	サジ	ケン	ケサン	クラ	クシ	クギ	キリ	カンバン	カンナ	カンザシ	カラウス	カモキ	カミノリ	カマ	カベ	カナヅチ	カツバ	カサネバコ	カギ	オホヅツ	イン	イトグルマ

『小学通常物問答』 和田幾太郎・生駒東太編

(近江佐平 一八七七年)

二種の『小学通常物問答』(明治一〇年)について

花瓶	機	柱	梯	箸	刷	衡	鑿	鋸子	長持	千里鏡	砥石	鉦	鎖	葛籠	發燭	箕	簿	椽	畳	簾	鋤	蒸露鐘	障子	注碗
ハナイケ	ハタ	ハシラ	ハシゴ	ハシ	ハケ	ハカリ	ノミ	ノコギリ	ナガモチ	トヲメガネ	トイシ	テヲノ	デウ	ツヅラ	ツケギ	チリトリ	チヤウ	タルキ	タタミ	スダレ	スキ	シヨウロクカン	シヤウジ	ジヤウゴ

箴	龍吐水	矢立	錯子	度	棟	筵	顕微鏡	店	窓	斗量	書櫃	行厨	屏風	書函	襖	袱	紐	琵琶	鈷鋸	碾磨	梁	針鉞	箒
ヲサ	リウトスキ	ヤタテ	ヤスリ	モノサシ	ムナギ	ムシロ	ムシメガネ	ミセ	マド	マス	ホンバコ	ベントウ	ベウブ	フバコ	フスマ	フクサ	ヒモ	ビハ	ヒノシ	ヒキウス	ハリ	ハリ	ハハキ